

W・F・ヴェルティム著

『推移の中にある
インドネシア社会』

——社会変化の研究——

W. F. Wertheim. *Indonesian Society in Transition: A Study of Social Change*, Sec. Rev. Ed. The Hague and Bandung: W. van Hoeve Ltd., 1959. xiv+394 p.

1つの経済なり社会なりに、たとえ確固たる目的とするものがあっても、その社会の動きを左右している諸要因が一定の様式にのっとって動いていない場合にはその社会の論理的な分析がなかなかやっかいなものになることはいうまでもない。ところがこういった事態が第2次大戦を契機として古い植民政府のかせをぬぎ去って独立したアジア諸国の現状なのである。けだしそれはそれらの国々のもつ技術、経済、社会などの段階とそれ以外の国々のもつそういったものの段階、すなわち達成可能な現実的な可能性とのあいだのギャップが非常に大きいので、そのためにそういった可能性に達する方法もまた数多く、したがって諸要因の動きうる領域もまた広範であることに主たる原因をもつと考えられる。

インドネシアもこの例外ではない。戦後新しく生まれたこの国のなかでも早く他の諸国に遅れをとらない力強い国にしたいと国民はみなそう願ひ、そのために努力しており、その意味で確たる目的はあるが、他の国々とのあいだにある隔差の許す数多くの選択の可能性はその社会の変化ないし移行の過程においてきわめて複雑な錯綜した関係を生ぜしめており、そのことがそういった諸様相をもつ諸要因の構成のなかに生じているインドネシアの社会なり経済なりの分析を非常に困難ならしめている原因となっている。しかしその研究が少なくとも分析的であろうとするかぎりその問題はなんらかの形で解決されねばならないものであり、したがってある研究においてその社会なり経済なりを規定する要因がいかん選択されているかということと同時に、その諸要因内のないしは諸要因間の作用関係がどのような形で把握されているかということ、すなわちそのアプローチのあり方はわれわれにとっておおいに関心のあるものといえるであろう。

こういった観点からみると、社会の変化を問題とした本書は、とくに著者自身と分析方法のあり方に関心をよせながらインドネシアの複雑な事態を究明しようとしているものであるから、まずこの意味できわめて興味深いものである。

さて本書の著者ヴェルティムがとった方法をみるまえに、われわれは本書の考究の対象としたものがナショナリズムであり、それに作用を及ぼす要因として経済組織、身分組織、都市、宗教、労働関係、文化といったものの変化がそこで取り上げられ、それらの諸要因をそれぞれやや独立的に究明してゆくなかにナショナリズムの動きをとらえようとしたのが本書の一般的な構成であることをまず指摘しておかねばならない。

そしてこういった構成のなかで、著者がそれらの諸要因の変化ないし推移や作用関係の究明を、社会学的方法を基礎におくとはいえ歴史的に行なおうとしている点、つまりこういった諸要因の変化をきたす諸要素を一定のものに切り切らずに、現実に現われた歴史的動態のなかにみようとする点に上述の意味でのわれわれの興味を中心がある。

まさにこういった歴史的考察方法こそが、複雑な様相をもつアジア諸国やインドネシアの分析にとってもっとも重要な方法だと著者は主張するのである。すなわち「アジアの社会はもろもろの社会状態が相互にからまっていて、その社会を経済学、社会心理学、文化人類学ないし宗教制度学のような専門化された科学的訓練をもとにして考究すれば、きっとわれわれのもつ全体の視野を失ってしまうような状態にまさしく存しているものである」(p. vii)とし「さまざまな人間社会の創生にじゅうぶんな注意を払い、その社会の現在の構造をその社会の経済史および技術的發展、あるいはもっと一般的にいえば、人間の動態に関係づける社会学のみが人間行動に関するわれわれの理解を増大することができるであろう」(p. vii) というのである。

要するに、まえの論旨にかえっていうならば、著者の態度は前述のような諸要因を挙げたとはいえ、そのそれぞれの要因の分析において1つの専門化された科学——それが西洋という発展段階の異なる構造の中で成育したものである場合はとくに——によってそれを行なおうとすることは不可能で、ただそれを可能とするのは人間社

会の創生を考慮し、人間の動的行動と現在存している社会の構造とを結びつけるような歴史的分析方法のみであると主張するのである。まさにこういった態度をもって分析しようとした点において本書のもっとも興味深い点が存するのである。

しかしこの方法の評価をすることはきわめてむずかしい。それにはさらに時間を要するといえるかもしれない。

しかしともかくも、こういった方法を用いたにもかかわらず、あるいはそれ以前の問題かもしれないが、各章の内部にあって因果の不明瞭な点が少なくないことはいなめないし、決定的な要因を中心とした各章がお互いに有機的な関係をもちえていないという感じや、結論となる第11章も前の諸章からの関連においてじゅうぶん浮かび上がってきていないという感じは残らざるをえない。ただし著者のこういった歴史的分析のなかにおいてただ単なる記述的なものではなしに1つの特徴的な姿をとらえようとしていること——たとえばナショナリズムを規定する重要な諸要因として挙げられた経済組織、身分組織、都市、宗教、労働関係、文化などの変化ないし推移の考究において、西洋の影響力の浸透以前、それが浸透するようになった19世紀の事態、今世紀のはじめごろから恐慌ないし日本進駐までの期間、およびごく最近の事態といった4つの局面に分けて分析しようとしていることなどはこのあらわれといえよう——や、またたとえば経済技術的な水準の低位さのもつ因果関係などに歴史的な事実を掘りさげて究明している点などは高く評価されねばならないものといえよう。

しかしこの書のもつもう1つの大きな貢献がある。それは上述のようなナショナリズムを規定する諸要因の分析にはいる足がかりとして著者が設けた「多様相のなかにおける統一」(第1章)、「地理的概観」(第2章)、「南および南東アジアにおけるいくつかの社会発展の素描」(第3章)、「インドネシア政治史の一般的概観」(第4章)などはその目的からしていうまでもないが、そのあとに続く諸要因の分析自体も各章ごとにやや独立した形で論じられており、しかもそういった諸要因がいずれの観点からみる場合でもインドネシアの社会を形造っているきわめて重要な諸要素といえるばかりでなく、その分析も学問的に高い水準のうえに行なわれているのであるから、インドネシアの好個の概説書となるということ

である。

それゆえ最後に各章の内容を一応簡単にみてみよう。

第1章では地理的差異、人種の差異やまた立地的差異などが、インドネシア全体をおおう類似性と一緒になって形造られた初期時代の構造の基礎のうえに、現在の構造が形造られているとし、

第2章では各島嶼別の領土、人種などを概観し、

第3章では南アジアや南東アジア一般における古代社会の静態性、西洋文明や経済の与えた効果、アジアのブルジョアジーの特異性やアジア諸国にみられる共同体的な動きなどをみ、

第4章ではマジャパジット王国時代前後から近時にいたる政治史の概観がなされ、

第5章の「経済組織の移り変わり」では、水田耕作地域と移動農耕地域という異なる自然的立地を背景として生まれた初期の経済構造が、オランダの到来によりその植民政策の作用が、たとえば人口の増加や貨幣経済の浸透をもたらした、それが今度は逆にその政策の変化をうながしていった様子などを考察し、

第6章の「身分組織の変化」においてもそういった耕作技術の違いがもたらした経済的余裕の差異を基礎としてもっていた初期の時代の身分制度に、オランダのもたらした西欧人あるいはその血をひくものの優位の政策や強制耕作制度などの政策によっていかに新たな身分組織の変化が生じ、さらにそれがその後の教育制度の普及や日本の進駐時代のインドネシア人登用の政策などによって、また独立後のインド・ヨーロッパ人や華僑の低落などによっていかに身分構造の変化を生じたかをみ、

第7章の「都市の発展」においては、初期の君主の権威を中心として打ちたてられていた都市構造のうえにオランダ到来による西洋的要素と東洋的要素との混合や対立、1870年以来の自由企業制度採用によるその変形、都市内に存した各人種の抗争、都市人口の増大などのもたらす諸問題などが考察され、

第8章の「宗教改革」ではインドネシアにはいつてきたイスラム教が、その教えの基調としての人間性の強調の姿はもちつとも、すでにアジア諸国に存在していた社会的不平等や商業都市の階級構造を反映した形もっていること、そのイスラム教が西洋の侵入を契機として拡大し、それがとくに中産階級に個人の価値や団結感や統一力を与えたこと、しかし他方でそういった宗教的基盤の弱さへの反省はムハマディア運動やアフマディア運動

やサリカット・イスラムやワハビ運動などを生み、またそれらがいかなる役割をはたしたかということ、さらにサントリとアバンガン、ナフダトゥル・ウラマとムハマディア、イスラム教内の急進的なものと正統派的なものといったものの対立や意義などを論述しているし、

第9章の「労働諸関係の様式の変化」においては、共同体を中心とする労働と伝統的主君の命に従って働く労働とからなっていた初期の型のうえに、西洋の到来とともに、それが初期の植民政権における強制的な労働からのちの賃金労働へどのようにして、またどのような契機で変わっていったか、そしてそれがどんな効果を人民に与えたかということや、インドネシアの労働組合運動が村落的な基礎のうえに立っていること、その指導者の階層の特異性、またそれが生産の成長のない、しかも物価騰貴の中でじゅうぶん効力を発揮しえないうことなどが考察され、

第10章の「インドネシアにおける文化の動態」では、異なった立地、つまり水田地域と移動耕作地域との中に生じた初期の文化が、その形態を温存しつつもヨーロッ

パ文化の影響によりメスティゾ的文化を生んだり、また他方ワハビやパドリのような反発的な行動を生んだりしたことや、また20世紀の初期におけるような西洋文化の模倣的動きやその過度の模倣の反省としてのタマン・シスワのような形態、また現在の文化のもつ都市文化と地方ないし農村文化との不統一な形態などが究明されている。

そしてこういった究明ののちに著者はインドネシアのナショナリズムがはじめ不統一だった状態からしだいに変転をへて独立後に大衆に根をおろすようになるまでの過程を第11章でみるのであり、最後の「最近の局面」という章は、この第2版の改訂版によって追補された部分の1つであるが、そこでは1955年の総選挙の憲法会議の選挙の結果からイスラム教政党、都市の知識階級と農民との関係、国際関係や共産党などの動きを予測したり、軍部の動向と地位、西イリアンなどを中心とするオランダとの関係、反乱軍問題などを扱っている。

(アジア経済研究所海外派遣員 鈴木長年)

— 在バントン —

東南アジアの機械市場
— 輸送機械需要と国際競争関係 —
調査研究報告双書 第28集

橋 弘 作 編

概 要	橋 弘 作
第1部 総 論	玉 置 正 美
第1章 東南アジアの輸送機械輸入需要を規制する諸条件	
— 東南アジア貿易構造の基本的性格・東南アジアの輸入政策と外資導入政策・東南アジアに対する各国の経済援助 —	
第2章 東南アジアの交通発達と経済開発計画	
— 東南アジアにおける交通の量的発達過程・東南アジア交通の質的变化・東南アジアの経済開発計画と交通、運輸 —	
第3章 東南アジアの輸送機械輸入と国際競争関係	
— 戦前、戦後の輸入規模の比較・輸入機種構成の変化・主要工業国の対東南アジア輸送機械輸出・対東南アジア輸送機械輸出の国際競争関係 —	
第2部 各 論	
第1章 東南アジアの鉄道車両輸入需要	宮 田 忠 雄
— 概要・鉄道車両工業の現状・東南アジア主要国における鉄道車両輸入の現状・日本の鉄道車両輸出主要市場と国際競争関係・東南アジア諸国鉄道の現状 —	
第2章 東南アジアの自転車輸入需要	宇 野 博 二
— 概要・主要国における自転車工業の現状・各国における自転車輸入の現状・日本の自転車輸出市場と国際競争関係・展望と対策 —	
第3章 東南アジアの船舶輸入需要	浅 野 芳 郎
— 概要・主要国における造船工業の現状・主要国における船舶輸入の現状・日本の船舶輸出主要市場と国際競争関係・対策と展望 —	
第4章 東南アジアの自動車輸入需要	寺 田 恵 一
— 東南アジアの自動車事情・主要国における自動車工業の現状 —	
結 論 要約と展望	
第3部 統計と文献	
付属統計表、参考文献	